

ラクダ遊牧民の家畜管理

——ティンブクトゥ地方のトゥアレグを例に——

今 村 薫

要約

ラクダ遊牧民トゥアレグの家畜飼養技術について詳細な調査をおこなった。彼らは、ヤギ、ヒツジ、ウシ、ラクダの4種の家畜を飼っているが、これらの家畜の出産、搾乳の時期は異なる。また、水やりの頻度も家畜によって異なる。したがって、複数種の家畜を組み合わせ飼うことで、水やりの労働や乳の生産量を、一年を通じて安定したものにさせている。また、彼らは季節に合わせて水資源と牧草を求めてキャンプを移動させる。彼らは降水量と家畜の種類に合わせて、キャンプと井戸の距離およびキャンプと牧草地の距離を考慮し、移動頻度を決定している。

彼らは家畜の名称を、性および年齢によって分類している。ヒツジのメスとオスについては年齢群によって7段階に分類している。同様に、ヤギのメスは10段階、ヤギのオスは9段階に分け、ウシのメスとオスは8段階に、ラクダのメスは9段階に、オスは11段階に分けている。ロバはオス、メスともに5段階に分けている。トゥアレグはさらに家畜の群れについても弁別しており、群れのサイズと家畜の種類によって異なる名称をつけている。

キーワード：トゥアレグ、牧畜、複数種の組み合わせ、名称分類体系、乾燥地適応

はじめに

マリ共和国の北部、トンブクトゥ地方に暮らすラクダ遊牧民トゥアレグの家畜管理の方法について報告する。トゥアレグは、北西アフリカに住むベルベル系の遊牧民である。彼らはアルジェリア、マリ、リビア、モーリタニア、ニジェール、ブルキナ・ファソにまたがるサハラ砂漠と、その南縁のサヘル地帯に暮らしている。総人口は200万人弱といわれ、そのうちニジェールにおよそ100万人、マリに約67万5千人が住む（Keenan, 2004）。

伝統的な生業形態は、ラクダ、ウシ、ヤギ、ヒツジ、ロバを飼って一定の土地を遊動する牧畜である。現在は、家族ごと放牧地周辺をキャンプで移動する人、女性と子どもは村に定住し

ながら、男性だけがサハラ砂漠で遊牧する人のほかに、集落に定住して家の近くで牧畜と農業をおこなう人、町に住んで商業活動をおこなう人など、彼らの生業はさまざまである。近年は定住する人が増えている。

マリのトゥアレグが飼う家畜の中で、ヤギ、ヒツジ、ウシ、ラクダは、牛乳、肉、皮を利用する。またこれらの家畜は、売却して紅茶、砂糖、穀物の購入にあてられる。

ラクダとロバは、物品の運搬に使われる。近年は、砂漠を走る四輪駆動車が、運送運輸の中心になっているが、現在でも、100頭近いラクダやロバの背に塩や穀物を積んでサハラを歩き来する隊列を見かけることがある。

ラクダ、ウシ、ロバは井戸において、水汲みのロープを引く仕事に使われることがある。深

い井戸から水をくみ上げるときは、これらの家畜が50メートル以上のロープを引いては井戸に戻るということを数時間も繰り返す。

牧畜民が家畜の名称を詳細に分類することは、しばしば報告されている（松井，1980；太田，1987）。北西アフリカに住むベルベル系の遊牧民であるトゥアレグの家畜の名称について、2006年より調査を始めたが、彼らもまた、じつに詳細かつ複雑な分類体系を持つことがわかった。さらに、家畜管理に適切な群れの大きさあり、彼らは、群れのついても分類をおこなっている。本書では、このような彼らの分類体系を報告するとともに、これらの分類から彼らの家畜観を考察する。

1. 季節変化

トゥアレグの牧畜は、乾季と雨季という二つの季節に合わせて変化する。以下に季節変化に合わせた家畜の飼い方を概略する。

1-1 乾季

乾季は、10月から6月までの8～9ヶ月間だが、彼らは乾季を、「乾季の初め *yarāt*」「乾季の中盤 *tājrast*」「乾季の終わり *ewelān*」の3期にわけている。

yarāt：10月から11月。乾季の初めで、乾燥してやや寒い、比較的過ごしやすい。

tājrast：12月から3月。乾燥して寒い。牧草は枯れているが、寒さのせいで蒸散量は少なく、井戸水も利用できる。

ewelān：4月から6月。乾燥して暑く、家畜の消耗が著しいとき。牧草地の草は枯れ、井戸水も枯れる場合があり、この時期が家畜と人間の生存にとってもっとも厳しい時期である。ウシには他の季節には牧夫（飼い主）はつかず、ウシ

が勝手に放牧地へ移動しているが、この時期だけは、移動のコースを選定しなければならないので、ウシの群れにも牧夫がついて歩く。牧夫は、早朝にキャンプを出発し、夕方遅くに戻ってくるという生活を送る。

トゥアレグの家畜の飼い方の基本は、搾乳のために夕方家畜の群れをキャンプのそばまで誘導し、一晩キャンプ周辺で過ごさせる。害獣がいないので、幼獣を囲いに入れる以外にはとくに成獣用の家畜囲いは設けない。そして、翌朝、牧夫が放牧地へ連れて行き、昼ごろに井戸で水を与え、夕方遅くに家畜をキャンプに戻らせる。必要に応じて、水やりを先にやってから放牧することもある。いずれにしても、家畜は、放牧地、井戸、キャンプの3点を往復する。

乾季には、放牧地の草は茶色く枯れているが、この枯草を家畜に与える。また、草から水分を摂取できないので、家畜には井戸水を定期的に与えなければならない。したがって、乾季には井戸 *emasāw*（単数形）、*imāswān*（複数形）の近くにキャンプを設営する。

家畜の消耗を防ぐためにできるだけキャンプを移動させたくないが、乾季の半ばを過ぎると、放牧地の草が完全に食べつくされてしまう。この枯渇の程度によって、別のキャンプまで家畜を移動させるかどうかの決断をしなければならない。放牧地は、最低2週間は家畜に草を供給できる場所を選ぶ。しかし、家畜が根こそぎ草を食べつくすのを防ぐために、雨季であっても最長3か月程度で次の放牧地へ家畜を移動させる。

移動先は、家畜の種類、家畜の頭数、牧草として利用できる植物の量、放牧地と井戸との距離、井戸の水量などを考慮に入れる。

とくに、キャンプから井戸までの距離が、キャンプ設営の決め手となる。標準的なキャンプ（構

成員には男性のほか女性と子どもを含む）から井戸までの距離は平均4キロだが、最大で12キロ程度である。ただし、この距離は、キャンプの構成員と家畜の種類によって異なり、極端な例では、キャンプに男性だけが住んでおり、さらに、ラクダだけを飼っている場合、キャンプから井戸までの距離は40キロでも可能だという。

家畜の構成や状況、季節によってキャンプと井戸との距離は変わる。たとえば、乾季には、ウシは2日に一度水やりが必要だが、ヒツジ、ヤギは3日に一度の水やりで済む（表1）ので、ヒツジ、ヤギを比較的多く飼っている人は、ウシを中心に飼っている人より井戸から遠くの牧草地に近い場所にキャンプを設営する。しかし、後述するように、乾季はヒツジの妊娠期間であるので、妊娠により弱っているヒツジが多い場合は、放牧地よりも井戸を優先させる。

また、井戸の水量や井戸の所有者との関係が、どの井戸を利用するか判断基準になる。井戸によって、およそその水量が決まっており、また、井戸の所有者との関係（親族関係）によって、井戸利用の優先順位が決まってくる。

水量の少ない井戸では、一度低くなった水位が再び上がってくるまで数時間待たなければならない。また、井戸の利用者が多い場合、優先順位が低ければ、水やりを半日待たなければならないこともある。

乾季のもっとも厳しい時期（*ewelān*）には、家畜の水やりが数時間遅れただけで、家畜の生存が危うくなることがあるので、井戸選びは慎重に行わなければならない。

移動の頻度と範囲について、私が聞き込み調査により得られたG氏の一例をあげる。

A氏は、2010年10月から2011年12月までに、2010年10月、2011年1月、2月、6月、9

表1 家畜に井戸水を与える頻度

	乾季	雨季
ヒツジ	3日に一度	数週間に一度
ヤギ	3日に一度	数週間に一度
ウシ	2日に一度	毎日
ラクダ	4日に一度	数週間に一度
ロバ	3日に一度	数週間に一度

表2 G氏のキャンプ移動の記録

	地名	滞在期間（月）
①	Tiriken	10月11月12月（2010年）
②	Agnana	1月（2011年）
③	Tinakren	2月3月4月5月（2011年）
④	Nibi-af-aljamaa	6月7月8月（2011年）
⑤	Azima	9月10月11月12月（2011年）

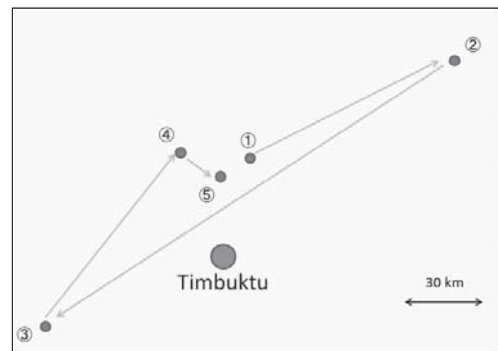


図1 G氏のキャンプ移動の軌跡

月の5回、トンブクトゥ北部に位置する東西約150キロ、南北約80キロの地域において、キャンプを移動させた。（表2、図1）

ただし、G氏は所有する家畜の頭数が少なく（ウシ32頭、ヤギ10頭、ヒツジ3頭、ロバ7頭）、しかも2010年と2011年は降雨量が例年と比べてかなり多かったため、移動の頻度が少なかったという。

1-2 雨季 (akasa)

6月から9月までの3～4ヶ月が雨季である。トゥアレグは、乾季の放牧地を出て、より広大な選択の余地のある土地へ移動を開始する。彼らは乾季には人間も家畜も集まって過ごし、雨季になると分散する。

また、この時期に、家畜の群れを「塩の池 *tādre*」へ連れていき、塩辛い水を飲ませる。「塩の池」は、塩分の多い土地に、雨季に雨が降って一時的にできる池である。(tādreは、塩水そのものも意味する。)あるいは、人間が、「塩を含んだ土 (*ahara*)」を、ロバやラクダで運搬し、自分の家畜になめさせることもある。

(*ahara*は、「塩を含んだ土」と「塩を含んだ土地」の両方を意味する。)

家畜への塩分の補給は、数か月に一度必要だが、もっとも厳しい乾季 (*ewelān*) には塩を与えない。

雨季には牧草が豊富なので、草の種類を選び、それぞれの家畜が好む種類が多い放牧地へ家畜を連れて行く。

雨季の終わりには、乾季に備えて十分に草のある土地へ移動する。

トゥアレグの牧畜は、放牧地や井戸をコントロールしながら、より広い土地を巡回して利用しており、砂漠化、特定の植物種の消失、伝染病などの環境に有害な多くの要因を回避してきた。

2. 家畜の繁殖と授乳をコントロールする方法

トンブクトゥでは、すべての家畜は、午前中にキャンプを出発し、太陽が沈むまで帰ってこない。ヒツジとヤギは、牧夫がついて歩くが、ラクダとウシには牧夫は必要ではない。

人間がミルクを搾乳するために、すべての家畜の幼獣(仔ウシ、仔ヒツジ、仔ヤギ、仔ラクダ)を群れから離し、キャンプの近くに留めておく。

以下に家畜ごとに、繁殖時期と出産、離乳、去勢について説明する(表3、表4)。

2-1 ヒツジ

ヒツジは、トゥアレグが飼う家畜の中で唯一繁殖時期をコントロールできる動物である。それは、ヒツジの雌が一年中、交尾が可能であるからだという。ヒツジの妊娠期間は5か月なので、一年に2回出産させることもできるが、トンブクトゥ地方では、通常、雨季(7～9月)に1回だけ出産させるようにする。

これは、雨季には牧草が豊富なので、人間が搾乳した後も十分な乳で仔ヒツジを发育させることができるからである。また、とくにヤギと比較すると、ヤギは人間が繁殖をコントロールしないが、ヤギの習性として雨季の終わりに交

表3 家畜のライフ・サイクル

	離乳 (生後)	性成熟 (生後)	繁殖旺盛(メス)	老齢 (メス)
ヒツジ	5-6 ヶ月	6-12 ヶ月	4-5年	7歳
ヤギ	5-6 ヶ月	6-12 ヶ月	3-5年	7歳
ウシ	2-3年	3-4年	5-8年	12歳
ラクダ	2-3年	4年	6-8年	15歳

表4 家畜の交尾期と授乳期間

	交尾期	妊娠期間	出産期	授乳期間
ヒツジ	3月	5 ヶ月	8月	5-6 ヶ月
ヤギ	7-8月	5 ヶ月	1-3月	5-6 ヶ月
ウシ	8-9月	9 ヶ月	5-6月	2-3年
ラクダ	6-9月	12 ヶ月	6-9月	2-3年

尾をする場合が多く、その結果、ヤギは1月から3月の乾季に出産する。家畜の乳を一年を通じて確保するために、ヤギとヒツジの出産の時期をずらす(図2)。

人間がうまく繁殖に介入すれば、200頭の雌の群れに1頭の種雄を入れて、3週間以内に群れの90パーセントの雌を妊娠させることができるという。出産後の搾乳の管理を楽に行うためにも、すべての雌の出産時期が1か月以内に集中することが望ましい。

出産後、仔ヒツジたちは集めて囲いに入れられ、日中は母ヒツジと分離されて過ごす。生後1〜2週間は、仔ヒツジは自力で母ヒツジにたどり着くことができないので、夕方、放牧地から帰ってきた母ヒツジのところへ、人間が仔ヒツジを連れて行って対面させる。このため、まず、人間が母仔のペアを覚えておかなければならない。ヒツジの個体識別は、体の模様、尾や耳の形で覚える。仔ヒツジについては、抱きかかえたときの体の重さでも識別する。このようなヒツジ(および後述するヤギ)の世話は、キャンプに少年がいれば少年が受け持つ。いなければ大人の男性が行う。

また、この時期は、まず仔ヒツジが母ヒツジの乳首を吸って刺激しないと、乳が出てこない。まず、仔に乳を飲ませてから、次に人間用の乳を搾る。仔ヒツジは生後1週間から草を

食べ始めるが、1か月までは乳の栄養によって成長する。

生後2週間を過ぎると、仔ヒツジが乳首を吸わなくても搾乳できるようになるので、人間用の乳をまず搾ってから、残りを仔ヒツジに与えるようになる。母仔は一晩中一緒に過ごす。このころになると、仔ヒツジは自分で母ヒツジのところまで行けるようになるので、いちいち人間が母仔の対面を介助しなくてもよくなる。

生後3週間を過ぎると、日中に仔ヒツジを囲いに入れておくのをやめ、キャンプ周辺で過ごさせるようにする。

生後4週間から6週間たつと、母ヒツジの乳の量は、少しずつ少なくなっていく。

生後5〜6か月で、人間の介入によって離乳をさせる。離乳は、個々の仔ヒツジの状態に合わせて行われる。

離乳の方法は、3通りある。①糞(ヒツジの糞でも、ヤギの糞でもよい)を母ヒツジの乳首に塗り付け、仔ヒツジが乳首に接近できないようにする。(仔ヒツジが臭いを嫌がる。)②木の根で作った輪^{afärkit}を母ヒツジの乳首につけて、仔ヒツジが乳首をくわえることができないようにする。(物理的に妨害する。)③仔ヒツジの鼻に小枝を刺す。こうするとトゲが母ヒツジの乳房にあたり、母ヒツジが子どもを近づけないようにする。

これらの方法は、①から順に優先される。③の方法は、母ヒツジの乳房を傷つけるおそれがあるので、最終の手段である。

この離乳と同時に母仔を同じ群れで行動させるので、離乳が不完全だと人間用の乳が昼間の間に仔に吸われてしまう。したがって、牧夫は、離乳が完遂されているかどうかを注意深く観察する。確認のために以下の3つのことを行う。

①仔が母の乳を吸っていないか観察する。②母

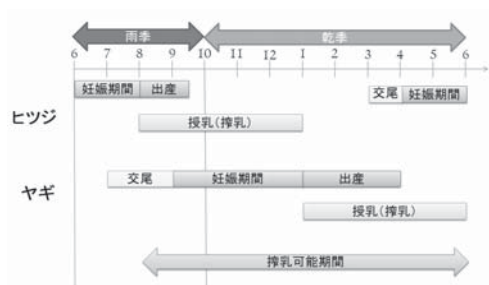


図2 ヒツジとヤギの搾乳期間

の乳首に糞あるいは木製の輪がついているかどうかを見る。③夕刻、搾乳するときに、乳房の乳の量を調べる。量が少なければ、仔が乳を吸っていることになる。

授乳中に、仔ヒツジが死ぬと、他の雌の仔を与えて搾乳を続ける。とくに、生後6週以下の幼い仔を亡くした場合は、母ヒツジの乳量がまだ多く、搾らなければ乳房が炎症を起こしたり病気になったりするので、他の仔ヒツジを養子として与える。他の雌が双子を産んだ場合は、その1頭を、仔を亡くした母に与えることができるが、双子がいない場合は、1頭の仔ヒツジに養子の役目を負わせるので、そのヒツジには2頭の母がいることになる。

母ヒツジに、他の雌の仔を、自分の仔と認識させるためのテクニックは以下のとおりである。仔ヒツジを、母ヒツジの後ろに立たせ、人間が親指を母ヒツジの膺に入れ、数分そのままにしてから指を出す。それから、仔ヒツジを母ヒツジに見せると、母ヒツジは、今、その仔を出産したと勘違いする。その後、2頭を一晩一緒につないでおくと、翌朝には、すっかり「親子」のように振る舞うようになる。

また、離乳と同時に雄の仔には、去勢手術を施す。雌ヒツジと雄の仔ヒツジが同じ群れで行動するようになるからである。また、ヒツジとヤギは、去勢すると成長がはやまるといわれる。

去勢は、陰囊の外側をナイフで切り、そこから、精巣を取り出して切除する方法が取られる。去勢した雄の100頭に5頭は感染症で死ぬが、手術が成功すると2週間で完全に傷が治る。手術直後によく歩かせると、出血が止まり回復が早くなるという。

繁殖用の種雄は、自分の群れから1頭だけ残すこともあるが、種雄を専用に育てている人から買い取る場合が多い。自分の群れから種雄を

育てる場合、その選定の基準は、①健康で体格が大きいこと、②母ヒツジがたくさん乳を出す、の2点である。②については、母の乳量の多いと、その性質が遺伝すると期待されるからである。種雄1頭で雌200頭を妊娠させることが可能だが、通常は、雌100頭の群れに種雄1頭を混ぜる。したがって、雌400頭の群れならば、種雄4頭が必要である。種雄は、1シーズンの繁殖期間で消耗しきって死んでしまうか、死なくても繁殖が終わると屠擦されて食べられる。

以上を、時間経過に合わせて整理する。4月前後に交尾をさせ、8月に出産。8月から12月まで乳を仔に飲ませ、12月中旬に離乳させる。離乳後も1月いっぱい人間用の乳を搾るが、やがてその乳も出なくなる。そして3月から、また繁殖の季節がやってくる。

2-2 ヤギ

ヒツジとは異なり、ヤギの繁殖は人間がコントロールすることはできない。雌に発情期があり、その時期以外は雄を受け入れないからである。ヤギは雨季の終わりに交尾し、1～3月の冬に最も出産が多い。しかし、一年を通じて、いずれかの個体が交尾と出産が可能であり、雌から搾乳することができる。仔ヤギの管理や離乳の方法、また去勢雄の手術法については、ヒツジと同様である。

2-3 ウシ

ウシの繁殖の時期も人間はコントロールしない。しかし、雨季の終わりにほとんどの雌が交尾し、雨季の初めに出産がおきる。ウシの妊娠期間は、9か月である。

ウシの放牧には牧夫はつかないが、ウシは自分たちで放牧地まで行き夕刻にはキャンプに帰ってくる。キャンプに仔ウシがいるので母ウ

シは戻ってくるのである。また、ウシの群れは母系の母娘で構成されており、行動をともにする。したがって、一頭の雌がキャンプに戻ると群れの他の雌もついてくる。水やりのための群れの誘導は牧夫がおこなう。

出産後、仔ウシは母ウシと分離される。母ウシの群れが放牧から帰るころには、仔ウシが乳を飲まないように紐でつながれる。仔ウシをつなぐために、2つの木に渡した一本の太いロープに、細い紐を仔ウシの数だけ結び、その紐それぞれに一頭の仔ウシの首を結わえつける。

ウシは、仔ウシが乳首を吸わなければ、乳が出てこず搾乳することができないので、毎回、一頭ずつ仔ウシに少し乳を飲ませてから、仔ウシを母ウシから離して人間用の乳を搾る。雨季には、朝と晩の2回搾乳できる。仔ウシには、生後2～3年間、乳を飲ませる。しかし、母ウシは出産後1年で妊娠可能であり、仔ウシが1歳前後でも次の仔を妊娠する場合がある。そのときは、即座に離乳させる。人間用の搾乳を止めて仔ウシだけに集中して1か月間乳を与え、その後、一気に離乳させるということを行う。

離乳の方法は、以下の2種類である。①仔ウシの鼻に木を削ってつくったトゲ状のものを突き刺し、母ウシに近づけなくする。②木で作ったトゲを付けた皮のマスクを仔ウシの鼻に被せる。これらの方法により、仔ウシは草などの餌を食べることはできるが、トゲが母ウシを傷つけるので、母ウシは仔を近づけなくなる。

離乳後、母仔は同じ群れで行動させるので、雄の仔は離乳後、4歳までには去勢する。

2-4 ラクダ

ラクダの出産時期も人間がコントロールしない。しかし、ラクダは雨季に交尾し、12か月の妊娠期間を経て、雨季に出産される場合が多

い。ラクダは、季節を問わず、24時間ごとに搾乳できる。

夕方、母ラクダの群れがキャンプに帰ってくるころには、仔ラクダは、地面に立てた杭に縛り付けたロープを首に結わられる。

ラクダも、仔ラクダが乳首を吸わなければ、乳が出てこないで、毎回、仔ラクダに少し乳を飲ませてから、搾乳する。

上記の方法のほかに、トンブクトゥでは、授乳中の母ラクダの乳房を皮製の胸当てで覆い、乳を仔ラクダに与えさせない方法が採られる。

仔ラクダには2～3年間乳を与え、それから離乳させる。離乳には、①トゲ状の木を仔ラクダの鼻に突き刺す。あるいは、②乳房を胸当てで覆って仔ラクダに乳を飲ませないようにさせる。離乳の後、雄の仔は3～4歳までに去勢される。ラクダの場合、雄が性的に成熟するぎりぎりまで待ってから去勢される。あまりに早く去勢すると、雄の身体に筋肉がつかないからである。

授乳中の仔ラクダが死んでしまった場合、その後しばらくは搾乳を続けなければならない。そうしなければ、母ラクダが乳腺炎などの病気にかかるからである。しかし、仔がいない状態では、なかなか搾乳できないという。そのため、以下の技術を用いる。

死んだ仔ラクダの皮をはいでその中に詰め物をして、特別の「縫いぐるみ」を作る。この縫いぐるみを見せ、匂いがかがせることで搾乳ができる。しかし、この方法は、仔ラクダの死後2～3日間しか通用しない。この「縫いぐるみ」および、この方法のことを *alāmkara* という。このような死んだ仔の皮で人形を作る方法は、東アフリカのトゥルカナの例（太田，1987）など他の民族においても報告されている。

もう一つの方法として、ヤギとヒツジの方法

と同じく、別の雌の仔を「自分の仔」と認識させるやり方がある。これは、まず、木を削って作ったトゲで母ラクダの肛門を縫い合わせるように刺してふさぐ。すると母ラクダは便秘して腹が膨らみ、自分が妊娠していると勘違いするという。この状態を数日続けてからトゲを取り除いて排便させる。その直後に別の仔ラクダを見せると、その仔を自分が出産したと思い込むようになる。この方法のことを *assāmām* という。*assāmām* は難しい方法で、これを専門で行う人がある。この方法は、仔ウシを失くした母ウシについても用いる。

3. 水やり

ヒツジ、ヤギ、ラクダは、雨季の間の緑で新鮮な牧草がある状態では、水なしで数ヶ月生きることができるといわれている。しかし、乾季には、ラクダは4日に1回、乾季のヒツジとヤギは3日に1回は井戸で水を飲ませなければならない。

一方、ウシは、雨季こそ毎日水が必要になる。放牧地で毎日緑の草を十分に食べ、その草の消化に水が必要になる。乾季には2日に1回、水を飲ませなければならない。

井戸では、①ウシ、②ヒツジとヤギ、③ラクダ、④ロバの順に金属のタライから水を飲ませる。この順に、家畜の水への要求度が高いからである。ロバは、人間の飲料水をキャンプまで運ばなければならないので、最後に水を飲ませる。ロバは水を飲み終わると勝手にどこかへ行ってしまうのである。

人間用の水も、タライから皮袋に移してキャンプに運ぶが、この水は、一番はじめに、ウシの水やりの前に汲むこともあるが、ウシ、ヒツジ、ヤギ、ラクダが飲んだ後のタライから汲む

こともある。皮袋からは徐々に水が漏出するので、なるべく最後に水を入れた方が水漏れが少ないからである。このタライには当然、これら4種の家畜が飲み残した水も混ざっているが、人々は汚いとは思わないようだ。これらの家畜は、きれいな草だけを食べるので「きれい」だという。ただし、ロバの後は、水が汚れるといって人間用の水に使わない。

水やりは井戸で行うが、この作業には最低3人の男性が必要である。井戸の綱を家畜に引かせるのに一人、井戸から水をくみ上げて、水桶に入れるのに一人、家畜の群れを桶まで誘導するのに一人必要だからである。この水やりの作業を共同で行うため、数家族がかたまっただけでキャンプを設営する場合が多い。

水やりには費やす時間は、家畜の頭数によるが、数時間から長くて半日かかることもある。

4. 井戸

井戸は牧畜民にとって、なくてはならないものである。人間のための飲料水だけでなく、家畜のために、なんとしても一年を通じて水を確保しなくてはならない。

トンブクトゥ周辺はニジェール川の水系であり、数十メートルも掘れば、ほとんど確実に地下水脈に当たるだろうが、それでも、新しく井戸を掘削することは一種の賭けである。

新たな井戸の候補地は、①東あるいは西5キロのところにすでに井戸がある、②木が傾いてはえている、③ *tedāyne* という木がはえている、などを目安にして探すという。

①については、トンブクトゥ周辺は水脈がほぼ東西に走っていることから、すでにある井戸の東西を候補地に絞るである。また、木の根は水脈の方へ伸び、幹はその反対方向へ傾くこと

から②が目安となる。③の樹種の学名は不明だが、地下に水の貯まっている場所にはえる木だという。

掘削場所を決めると、人力で掘り進める。かつては、これをエクラン（奴隷階級）にやらせていたが、現在は、自分たちで掘る。直径2メートルほどの穴を、スコップでひたすら砂を掻き出して掘り進む。壁面に岩を埋め込んで崩れ落ちないようにする。

運がよければ10メートルで水が浸み出すが、通常、30～50メートル掘って水脈にたどりつく。場合によっては、100メートル掘らなければならぬこともあるのだが、現在も、機械を使わず、これを人力でやり遂げる人が大勢いる。

5. 乳と乳加工品

乳は、搾乳される期間ごとに4つに分類される。この乳に関する分類は、家畜の種類に関係なく同一である。

edayās : 初乳は出産してから72時間以内に得られる乳。

abarās : 初乳の後、1～2週間後までの乳。

āxx : *abarās* の後、離乳の1～2か月前までの乳。

dānyor : *āxx* 後、離乳までの乳。

出産後、初乳*edayās*を搾乳する。初乳は少量しか取れないが、生では食べられず、必ず火を通すか、発酵させてから消費される。もともと水分が少ないので鍋で煮つめると固体になり甘味を増す。この固形物を食べすぎると「肝臓をこわす」といわれる。食べた人の腹部が膨らんだり、肝臓が硬くなったりするという。

初乳を発酵させて作ったバターは珍重され

る。このバターと発酵させた凝乳（いわゆるヨーグルト）は、上記の生乳を煮つめたものとは異なり、いくら食べても肝臓をこわさない。

初乳後、1～2週間までの乳*abarās*は、やや薄めの乳である。この時期を過ぎると、濃くも薄くもない標準的な状態の乳*āxx*が、ヒツジ、ヤギの場合は3～4か月、ウシ、ラクダの場合は2～3年続く。*abarās*と*āxx*は、生乳、凝乳*issilaye*、チーズ、バター*uli*の形で消費される。

離乳直前の乳を*dānyor*という。離乳時期が近付くと、乳量はどんどん減ってくるが脂肪分に富むので、バター作りに最適である。

乳搾りは男性あるいは少年の仕事だが、乳の加工は女性が行う。漏斗*asəggifi*で乳を皮の袋*ekšer*に生乳を入れてよく振ると、脂肪分が分離してバターが浮いてくる。このバターをお玉じゃくし*asilkaw*ですくって別の容器に入れる。（写真6、写真7）その残りが凝乳になる。皮袋に前の凝乳が残っているので自然に発酵し、このとき、乳酸菌から酸が出て乳が固まる。あるいは、生乳に酢を入れて凝乳をつくる。乳を発酵させる、あるいは乳に酢を加えるのは、暑い気温の下で乳を酸性に保つことで雑菌の繁殖を防ぐという昔ながらの知恵である。

チーズを作るときは、生乳に凝乳剤を加えて固まらせたものを、草を編んで作った長方形のザルに掛けて水分をきり、これを、枝にかけて干してカチカチに固める。この乾燥チーズには塩が加えてあり、1年間保存できる。

凝乳剤は、ヒツジおよびヤギの第四胃の内膜および胃液*ayällem*に含まれる凝乳酵素キモシンで作る。凝乳酵素をとるために、生まれたばかりの仔ヒツジあるいは仔ヤギを1頭殺さなければならない。

ヒツジとヤギの乳は、生乳で消費されるほか、凝乳やチーズなどに加工される。ヒツジとヤギ

の乳はチーズを作るのに最も適している。

ウシの乳はとくに脂肪に富んで品質が良く、バター原料になる。次にバターに適する乳は、ヒツジであり、ヤギの乳は脂肪分がそれほど多くないが、それでもバターを作ることは可能である。

一方、ラクダのミルクは、加工されずにそのまま飲まれるだけである。ラクダの乳は、「塩味がする」「甘い」「水っぽい」など人によって意見が異なる。いずれにしても、ウシ、ヒツジやヤギの乳と異なり凝固しないとトゥアレグは言う。ラクダの乳は、飲んで下痢することはないが、飲むと尿の量が増え、「身体をきれいにする」といわれる。

ラクダの乳については、曾我(2011)によると、東アフリカのガブラはラクダ(ヒトコブラクダ)の乳を生で飲むと下痢するので凝乳を作るという。また、モンゴルではラクダ(フタコブラクダ)の乳でチーズも作るという(酪農学園大学の石井智子教授からの情報)。ラクダの乳の成分には、他の家畜よりも乳糖が多く含まれており、このせいで、乳糖耐性のない民族は、下痢をおこすと考えられる。

トゥアレグは、濃く煮だした緑茶に砂糖を入れて飲むが、このお茶には乳を入れない。生乳は、水代わりにそのまま飲むか、炊いた雑穀あるいは米にかけて主食になる。凝乳は、ドイツ(ナツメヤシの実。とても甘い)にかけて食べる。バターは、あらゆる料理に調味料として混ぜたり、米や雑穀を炊いたものにかけたりして食べる。自家製のパン(小麦粉を練ったものを熱い砂に埋めて蒸し焼きにする)に塗ることもある。チーズは、粉にして料理に混ぜたり、その粉を水に溶かして飲んだりする。

6. 家畜の分類体系

トゥアレグは、家畜の性、年齢、さらに単数か複数かというカテゴリーによって、非常に詳細に名前をつけて分類している。ヒツジ、ヤギ、ウシ、ラクダ、ロバ、さらにイヌとネコについて、分類ごとの名前を表にまとめた。

ヒツジ、ヤギ、ウシ、ラクダについては、一般名をオトナメスの複数形でいいあらわす。すなわち、ヒツジ一般をさす単語は、*tihätten* で、これは最も繁殖力のあるオトナメスの複数形である。同様に、ヤギは *ulli*、ウシは *iwän*、ラクダは *tälmen* がこれらの家畜の一般名称である。

一方、ロバ、イヌ、ネコについては、オトナオスの複数形(ロバ *išedan*、イヌ *iyadan*、ネコ *mostan*) が一般名になっている。

6-1 ヒツジ

メスは、乳児から老齢まで、7段階に分けている。メスは半年から1歳で性成熟に達する。4～5歳の、3～4回出産したメス *tehale* (s.), *tihätten* (pl.) が最も繁殖能力が高い。6歳以上のメスは出産頻度も低くなり、屠殺して食べられるか肉用に売られる。

オスは、種オスを除いて6段階に分類される。半年から1年で性成熟に達し去勢される。去勢オスは、若いオス *ebakar* (s.), *ibækren* (pl.) と、年長のオス *abajoj* (s.), *ibjāj* (pl.) に分かれる。去勢オスも、必要に応じて自家消費されるか売りに出される(表5)。

6-2 ヤギ

ヤギのメスはじつに細かく分類されており、10段階に分けられる。半年から1年で性成熟に達し、3～5歳の、1～3回出産したメス *tayāt* (s.), *ulli* (pl.) が繁殖の中心である。

表5 ヒツジ (*tihåtten*) の分類名

メス

年齢群	単数形	複数形
乳児	<i>takərwat</i>	<i>tikərwaten</i>
6カ月	<i>taškamt</i>	<i>tiškamen</i>
1-2歳	<i>taşayolt</i>	<i>tişyāl</i>
2-3歳	<i>tebakart</i>	<i>tibəkren</i>
3-4歳 (オトナ)	<i>tabajojt</i>	<i>tibjaj</i>
4-5歳 (繁殖旺盛)	<i>tehale</i>	<i>tihåtten</i>
老齢	<i>taboyamt</i>	<i>tiboyamen</i>

オス

年齢群	単数形	複数形
乳児	<i>akərwat</i>	<i>ikərwaten</i>
6カ月	<i>aškam</i>	<i>iškamen</i>
1-2歳	<i>aşayol</i>	<i>işyāyl</i>
去勢オス (若年)	<i>ebakar</i>	<i>ibəkren</i>
去勢オス (老年)	<i>abajoj</i>	<i>ibjayj</i>
種オス	<i>ekrar</i>	<i>akraran</i>
老齢 (オス一般)	<i>aboyam</i>	<i>iboyamen</i>

オスは、種オスを除いて8段階に分けられる。1年前後で性成熟に達し去勢されるが、個体差が大きい。また、ヤギはヒツジより成長が遅い (表6)。

6-3 ウシ

メスは、3～4歳で性成熟に達し5～10歳 *tās* (s.), *iwān* (pl.) がもっとも繁殖が盛んである。14～15歳をこえると老齢に分類され、屠殺あるいは売却の対象になる。

オスは、4歳前後で繁殖可能になる。3～4歳のオス *aşjār* (s.), *işjārān* (pl.), 5歳以上のオス *ehay* (s.) *ihaywan* (pl.) は、去勢後と去勢前を区別せず、この年齢のオスを意味する。とくに去勢オスであることを言うには、「去勢」

表6 ヤギ (*ulli*) の分類名

メス

年齢群	単数形	複数形
乳児	<i>teyaydat</i>	<i>tijaydad</i>
6カ月	<i>tabəkkelt</i>	<i>tibəkkelen</i>
10カ月	<i>tefārsajāyt</i>	<i>tifārsajāyen</i>
1歳	<i>tesajāyt</i>	<i>tisājayen</i>
1歳	<i>tafārdawālt</i>	<i>tifārdāwalen</i>
1-2歳 (オトナ)	<i>tadawālt</i>	<i>tidawalen</i>
3-5歳 (繁殖旺盛)	<i>tayāt</i>	<i>ulli</i>
6歳以上	<i>çagra</i>	<i>çagraten</i>
老齢	<i>teradej</i>	<i>tirdaj</i>
老齢	<i>eradej</i>	<i>irdaj</i>

オス

年齢群	単数形	複数形
乳児	<i>eyayd</i>	<i>ijaydan</i>
6カ月	<i>abəkkel</i>	<i>bəkkelen</i>
10カ月	<i>efārsajāy</i>	<i>ifārsajāyen</i>
1歳	<i>esajāy, ənfər</i>	<i>isājayen</i>
1歳	<i>aḡardawāl</i>	<i>ifārdāwalen</i>
1-2歳	<i>adawāl</i>	<i>idawalan</i>
去勢オス	<i>əjorh</i>	<i>əjorhan</i>
種オス	<i>aşolay</i>	<i>işulay</i>
老齢 (オス一般)	<i>gawil, eradej</i>	<i>gawilen, irdaj</i>

を意味する単語 *enekəḡ* をつけて、例えば *aşjār n-enekəḡ* のように言い表す (表7)。

6-4 ラクダ

メスは、3～4歳で性成熟に達し5～8歳の *taḡlāmt* (s.), *tāḡlmen* (pl.) が繁殖メスの中心である。年齢ごとに細かく分類され、メスは8段階、オスは種オスを除いて9段階に分けられる。

オスは、4歳前後で性成熟に達する。 *alajod* (2

表7 ウシ (*iwān*) の分類名

メス

年齢群	単数形	複数形
乳児	<i>tehadālt</i>	<i>tihadālen</i>
1カ月	<i>talokit</i>	<i>tilokiyān</i>
6カ月	<i>tašānkāmt</i>	<i>tišākāmen</i>
1-3歳	<i>tašjārt</i>	<i>tišjāren</i>
3-5歳	<i>tahayit</i>	<i>tihaywen</i>
5-10歳(繁殖旺盛)	<i>tās</i>	<i>iwān</i>
10歳以上	<i>tesaryawt</i>	<i>tisaryawen</i>
老齢	<i>esaryaw</i>	<i>isaryawen</i>

オス

年齢群	単数形	複数形
乳児	<i>ehadāl</i>	<i>ihādālan</i>
1カ月	<i>aloki</i>	<i>ilokiyān</i>
6カ月	<i>ašānkām</i>	<i>išānkāman</i>
1-3歳	<i>ašjār</i>	<i>išjārān</i>
3-5歳	<i>ehay</i>	<i>ihaywan</i>
去勢オス	<i>esu</i>	<i>aswanān</i>
種オス	<i>amaka</i>	<i>imuka</i>
老齢(オス一般)	<i>esaryaw</i>	<i>isaryawen</i>

～3歳)以上のすべてのオスは、各年齢の分類名に、「去勢」を意味する単語 *enekāḍ* をつけると(たとえば *alajoḍ n-enekāḍ*)「去勢オス」の意味になり、「去勢」に否定形の *war* を加えた *war-eniḥkāḍ* をつけると(たとえば *alajoḍ war-eniḥkāḍ*)「去勢前のオス」(繁殖オスにするか否かは決めていない)の意味になる。

アラブ世界では、ラクダの歯の萌出で年齢分類することが知られているが、トゥアレグもアラブの影響を受けて同様の分類を行う。

ヒトコブラクダは、生まれた時は乳歯を持っており、成長とともに永久歯に生えかわる。乳歯は、上顎(片側)が切歯0本、犬歯1本、乳

臼歯4本、下顎(片側)が、切歯2本、犬歯1本、乳臼歯3本で、上下左右の合計は22本である。

永久歯は、上顎(片側)が、切歯1本(第1切歯と第2切歯はなく、第3切歯だけ生える)、犬歯1本、小臼歯3本(2本から4本の個体差あり)、大臼歯3本あり、下顎(片側)が、切歯3本、犬歯1本、小臼歯2本(2本～3本の個体差あり)、大臼歯3本で、上下左右の永久歯の合計は34本前後である。

トゥアレグの分類によると、0～1歳では、乳歯のみ生えており、2～3歳から臼歯が永久歯に生えかわる。4～5歳で下顎切歯が2本(左右1本ずつ)、6歳で下顎切歯が4本(左右2本ずつ)、7歳で下顎切歯が6本(左右3本ずつ)、8歳で下顎切歯が6本(左右3本ずつ)と下顎犬歯が2本(左右1本ずつ)が生えそろう。この状態でオトナとみなす。9歳では、さらに上顎の切歯2本(左右1本ずつ)と犬歯2本(左右1本ずつ)も生え、完全なオトナである。この後、11歳ごろから歯がすり減ったり、虫歯になったりしてくる。そして、13歳ごろから歯が欠けたり色が悪くなったりして劣化が始まる。そして、15歳をこえると、歯が抜け落ちてきて採食が困難になる。なお、種オスは、下顎切歯が2本だけ生えている4～5歳の若いラクダである(表8)。

6-5 ロバ

ロバは雌雄とも、成長段階に合わせて5つのカテゴリーに分けている。

ロバについては、オスを去勢したり、母仔を分離したりして繁殖や搾乳をコントロールしようとはしない。ロバは肉や乳を食せず、運搬や井戸での綱引きなどの労働に使うだけである。普段は放し飼いにしているが、用事があるときだけ、飼い主は自分のロバを探してきてキャン

表8 ラクダ (*tālmen*) の分類名

メス

年齢群	歯の萌出	単数形	複数形
乳児 (0-1 歳)	乳歯	<i>tawarāyt</i>	<i>tiwarayen</i>
2-3 歳	永久歯未萌出	<i>tāsakayt</i>	<i>tisakayen</i>
4-5 歳	下顎切歯 2 本	<i>talajoḏt</i>	<i>tiḷjaḏ</i>
6 歳	下顎切歯 4 本	<i>taylamt</i>	<i>tiylamen</i>
7 歳	下顎切歯 6 本	<i>taḷlāmt, tāzzarāt</i>	<i>tālmen, tāzzamen</i>
8 歳 (繁殖旺盛)	下顎切歯 6 本 + 下顎犬歯 2 本	<i>taḷlāmt</i>	<i>tālmen</i>
9 歳	上顎切歯 2 本 + 上顎犬歯 2 本	<i>tarəjjānt</i>	<i>tirəjjanen</i>
老齢 (11-14 歳)	歯牙脱落	<i>tabaxult</i>	<i>tibuxalen</i>
老齢 (15 歳以上)	歯牙脱落	<i>taxugānt</i>	<i>tixuganen</i>

オス

年齢群	歯の萌出	単数形	複数形
乳児 (0-1 歳)	乳歯	<i>awara</i>	<i>iwarān</i>
2-3 歳	永久歯未萌出	<i>asaka</i>	<i>isakān</i>
4-5 歳	下顎切歯 2 本	<i>alajoḏ</i>	<i>iljāḏ</i>
6 歳	下顎切歯 4 本	<i>aylām</i>	<i>eylamān</i>
7 歳	下顎切歯 6 本	<i>amnəs, āzzarān</i>	<i>Imnas, āzzamān</i>
8 歳	下顎切歯 6 本 + 下顎犬歯 2 本	<i>amnəs</i>	<i>imnas</i>
9 歳	2 上顎切歯 2 本 + 上顎犬歯 2 本	<i>arəjjān</i>	<i>irəjjanān</i>
去勢オス		<i>azuzāl*</i>	<i>izuzāl*</i>
種オス (4-5 歳)		<i>amali</i>	<i>imulay</i>
老齢 (11-14 歳)	歯牙脱落	<i>abaxul</i>	<i>ibuxal</i>
老齢 (15 歳以上)	歯牙脱落	<i>axugan,</i>	<i>ixuganān</i>

* *azuzāl*, *izuzāl* はアラビア語由来

プのそばにつないでおく (表9)。

6-6 イヌとネコ

イヌは狩猟用や護衛用に飼っている人もいるが、まれである。砂漠では、むしろネコを飼っている人の方が一般的である。ネコは、毒蛇やサソリを退治してくれるので重宝するという。

イヌは、子犬とオトナイヌの2段階に分類されているが、ネコは、成長段階では分けない (表10, 表11)。

7. 家畜の群れの分類

トゥアレグは、群れの大きさに応じて、群れ

表9 ロバ (*išeḍan*) の分類名

メス

年齢群	単数形	複数形
乳児	<i>tamaynuk</i>	<i>timaynuken</i>
コドモ	<i>tahulelt</i>	<i>tihulelen</i>
ワカモノ	<i>tazawt</i>	<i>tizatten</i>
オトナ	<i>tešəat</i>	<i>tišeḍen</i>
老齢	<i>tebašnawt</i>	<i>tibašnawen</i>

オス

年齢群	単数形	複数形
乳児	<i>amaynuk</i>	<i>imuyyna</i>
コドモ	<i>ahulel</i>	<i>ihulelan</i>
ワカモノ	<i>aza</i>	<i>izatten</i>
オトナ	<i>ešeḍ</i>	<i>išeḍan</i>
老齢	<i>ebašnaw</i>	<i>ibašnawan</i>

表10 イヌ (*iyaḍan*) の分類名

メス

年齢群	単数形	複数形
コドモ	<i>taykart</i>	<i>taykaren</i>
オトナ	<i>tedit</i>	<i>tiyaḍen</i>

オス

年齢群	単数形	複数形
コドモ	<i>aykar</i>	<i>aykaran</i>
オトナ	<i>edi</i>	<i>iyaḍan</i>

表11 ネコ (*mostan*) の分類名

メス

単数形	複数形
<i>tamosit</i>	<i>timositen</i>

オス

単数形	複数形
<i>mos</i>	<i>mostan</i>

を分類している。彼らにとって「一群れ」とは、家畜の種類にもよるが、まず40頭が1単位である。そして、群れの大きさと、家畜の構成によって、放牧、水やり、搾乳などの管理の方法がかわってくる。

彼らは、毎日、家畜がすべて揃っているかチェックするが、決して数を数えない。一頭一頭の家畜の毛の色、模様のパターン、背格好、大きさ、歩き方などを覚えていて、夕方や朝に全頭がいることを確認する。キャンプ周辺でチェックするときは、同年齢ごとの群れのメンバーを確認したり、家系ごとに確かめたりする。

移動中にチェックするときは、先頭にいる個体群、真ん中の個体群、後ろから遅れてついて行く個体群に分けて点検する。先頭を歩く個体と、遅れる個体は、だいたいいつも同じであるという。家畜が数百頭いても、飼主（牧夫）は一頭もらさず出席をとることができる。

7-1 ヒツジ

- ① *timujār n-tihatten* 5～40頭の群れ。
- ② *ay n-tihatten* 40～50頭の群れ。
- ③ *tahrout* 50～100頭の群れ。
- ④ *asmāl n-tihatten* 40～50頭の群れ。②と異なる点は、この群れはワカモノ～オトナの繁殖力旺盛なメスばかりで構成されており、数年以内に豊かになれることを保証する群れであるという。*asmāl*は「よい始まり」を意味する。
- ⑤ *ehare* 100～300頭の群れ。ヒツジとヤギが混ざっていてもよい。家畜は十分に増え、人間は十分な乳と肉を得ることができる。
- ⑥ *ebartāk* 300頭を大きく超え、400頭前後の群れ。一人の人間が管理できるヒツジの数は、400頭が限界だという。*ebartāk*は、

「鞭」を意味し、家畜の列が鞭のように長く離れていて、管理しきれない状態のメタファーである。

ヒツジの群れは、40～50頭から始め、100頭くらいに増えたあたりが、ちょうど管理しやすい大きさだという（表12）。

7-2 ヤギ

- ① *timujär n-ulli* 5～40頭の群れ。
- ② *ay n-ulli* 40～50頭の群れ。
- ③ *asmäl n-ulli* 「ヤギのよい始まり」を意味する。40～50頭の群れ。ヒツジと同じく、繁殖力旺盛なメスのみで構成されている群れである。
- ④ *tedewält* ヤギのみ50～100頭の群れ。
- ⑤ *aräyräy* ヤギのみ100頭を超える群れ。多すぎて管理が大変である。

ヤギの群れも40～50頭から始め、100頭くらいが管理しやすい群れの大きさだという（表13）。

7-3 ウシ

- ① *iyafawan* 「頭」を意味する。数頭～10頭の群れ。ウシとラクダが混じっていてもいいが、ウシの方が数が多い。
- ② *asmäl n-iwän* 「ウシのよい始まり」を意味する。繁殖力旺盛な約20頭のメスだけで構成された群れ。
- ③ *tayafawt* 30～40頭のウシだけの群れ。
- ④ *asjæn n-iwän* 40～50頭の群れ。
- ⑤ *tasaräwt* 70～100頭のウシだけの群れ。*tayafawt*の2倍の大きさ。
- ⑥ *aršaj* 200頭を超えた群れ。多すぎて一人では管理しきれない。

ウシは、数頭から飼い始めて、40～50頭が一人の牧夫で管理しやすい群れの大きさだとい

表12 ヒツジの群れの分類名

分類名	群れの大きさ	コメント
<i>timujär n-tihatten</i>	5-40頭	
<i>ay n-tihatten</i>	40-50頭	
<i>asmäl n-tihatten</i>	40-50頭	繁殖力旺盛な年齢のメスばかりからなる
<i>tahrout</i>	50-100頭	
<i>ehare</i>	100-300頭	
<i>ebartäk</i>	300頭以上	多すぎる

表13 ヤギの群れの分類名

分類名	群れの大きさ	コメント
<i>timujär n-ulli</i>	5-40頭	
<i>ay n-ulli</i>	40-50頭	
<i>asmäl n-ulli</i>	40-50頭	繁殖力旺盛な年齢のメスばかりからなる
<i>tedewält</i>	50-100頭	
<i>aräyräy</i>	200頭以上	多すぎる

表14 ウシの群れの分類名

分類名	群れの大きさ	コメント
<i>iyafawan</i>	10頭	ウシとラクダが混じっていてもいいがウシ>ラクダ
<i>asmäl n-iwän</i>	20頭	繁殖力旺盛な年齢のメスばかりからなる
<i>tayafawt</i>	30-40頭	
<i>asjæn n-iwän</i>	40-50頭	
<i>tasaräwt</i>	70-100頭	
<i>aršaj</i>	100頭以上	多すぎる

う（表14）。

7-4 ラクダ

- ① *imujār n-tālmen* 数頭～10頭の群れ。ウシとラクダが混じっていてもいいが、ラクダの方が数が多い。
- ② *asmāl n-tālmen* 「ラクダのよい始まり」を意味する。繁殖力旺盛な約20頭のメスだけで構成された群れ。
- ③ *asjān n-tālmen* 40～50頭の群れ。
- ④ *tadyāwt* 100頭を超えた群れ。多すぎる。

ラクダは、数頭から飼い始めて、40～50頭が一人の牧夫で管理できる群れの大きさだという（表15）。

7-5 ロバ

- ① *imujār n-išēdan* 数頭～20頭の群れ。
- ② *asara* ロバばかり60～70頭の群れ。多すぎる。

ロバの群れは、他の食糧用の家畜ほど細かく分類しない。通常の群れサイズのもの、多すぎる群れを分類するだけである（表16）。

おわりに

トゥアレグは、複数の家畜を組み合わせ、出産や搾乳の時期をずらすようにしている。こうすることで、乾季と雨季という季節のリズムに合わせ、とくに厳しい乾季を乗り切っている。乾季を生き抜くために、井戸の水は重要である。井戸の水量と、牧草地の草の量を予測しながら家畜を遊動させることが、牧畜民トゥアレグにとって生存の鍵なのである。

家畜への介入は、水やりや群れの誘導のほか、搾乳、離乳、去勢、また、場合によっては病気治療のために、わざと火傷をさせる（灸のよう

表15 ラクダの群れの分類名

分類名	群れの大きさ	コメント
<i>imujār n-tālmen</i>	10頭	ウシとラクダが混じっていてもいいが、ラクダ>ウシ
<i>asmāl n-tālmen</i>	20頭	繁殖力旺盛な年齢のメスばかりからなる
<i>asjān n-tālmen</i>	40-50頭	
<i>tadyāwt</i>	100頭以上	多すぎる

表16 ロバの群れの分類名

分類名	群れの大きさ	コメント
<i>mujār n-išēdan</i>	20頭	
<i>asara</i>	60-70頭	多すぎる

なもの)などの世話や介入をおこなう。しかし、介入の内容や程度は、家畜の種類ごとに異なる。

また、彼らは、家畜の性年齢、群れの大きさ、乳の搾乳時期などに応じて、じつに詳細に認識し、分類している。彼らは、乾燥地の厳しい自然と折り合い、家畜を飼って生き延びるために、家畜を個体ごとに凝視し、多様に分類された家畜管理の技術を発達させてきたといえる。

トゥアレグにとって、家畜とは、すなわちメスの群れである。メスから仔が生まれて繁殖し、メスが出す乳が彼らの最も重要な食料だからである。したがって、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ラクダの家畜は、一般名をオトナメスの複数形でいいあらわす。ロバも家畜であるが、ロバは荷役用であり、食料ではないので、オスを去勢したりして繁殖を管理することもなく、分類の数も他の4種の家畜と比較してぐっと少なくなる。

また、彼らは、群れの大きさと構成に応じて、

群れを分類している。彼らにとって「一群れ」とは、まず40頭が1単位である。また、どの家畜においても「よい始まり」とは、繁殖旺盛なメスが中心の群れのことであり、家畜を殖やし始めるのにふさわしい群れの大きさがある。殖やし始めた群れはその後増殖していくが、群れには常に適正な大きさがある。それを越えた群れは、管理が難しいだけでなく群れ全体に害が及び、一度に群れの全てを失うことすらあるからである。

以上のようなトンブクトゥ地方の家畜管理の技術および名称分類体系を、他の地域の牧畜民と比較することを今後の課題としたい。

* この論文は、2011年度名古屋学院大学研究奨励金による研究成果の一部である。

引用文献

- Keenan, J. 2004, *The Lesser Gods of the Sahara: Social Change and Contested Terrain amongst the Tuareg of Algeria*, Frank Cass, London
- 太田至 1987「トゥルカナ族の家畜分類とそれになうハズバンドリーの諸相」和田正平編『アフリカ—民族学的研究』同朋舎出版, 731-769頁。
- 曾我亨 2011「ラクダ牧畜民ガブラの生業文化と社会」高倉浩樹, 曾我亨著『シベリアとアフリカの遊牧民—極北と砂漠で家畜とともに暮らす』東北大学出版会, 1-73頁
- 松井健 1980『パシュトゥン遊牧民の牧畜生活—北東アフガニスタンにおけるドゥラニ系パシュトゥン族調査報告』京都大学人文科学研究所調査報告第33号。